

イノシシの生態

山本さんにイノシシについて、詳しく聞いてみました。

好きな食べ物



生息域

暗いやぶの中や水場を好み、見通しの良い所を嫌います。

性格

とても臆病。しかし、慣れてくると人家に近づくこともあります。遭遇したら、刺激しないで立ち去ること。

行動

昼夜活動しています。大人のオスは単独行動。メスは子どもなどとグループで行動します。

活動時期

秋から冬にかけて最も活発に活動します。梅雨時期はあまり活動しません。



やまもと かつひこ
山本 哲彦 さん(65) = 三角町 =
自動車整備工場経営

皆で協力し、
防衛や駆除する方法を広めていきたい

地域の駆除を全て担う

戸馳島で有限会社山本自動車工業を営む山本哲彦さん。狩猟は趣味の一つでした。20歳の頃から始めた狩りは、鳥などを銃で仕留めるものでした。熊本県猟友会三角支部長も務めている山本さんが、イノシシ捕獲用の箱わなを仕掛け始めたのは、8年ほど前。市農政課からの駆除依頼を受けたことがきっかけでした。手作りのおりなどを三角町の高野山などに仕掛け、見回りや捕獲、止め刺しまで全ての工程を一人で行っていました。

一人では、
(全てはできない)
しこなさん

「この2〜3年で急にイノシシの被害が増えた」と三角町在住の皆さんは口々に言います。

「全て山本さん任せだった」とも。自営の傍ら、駆除に奮闘し続けた山本さん。しかし、1回の出産で2〜8頭を産み、約2年後にはその子どもも出産するイノシシ。どれだけ捕まえても、翌年にはさらに増えている状況に「こらあ一人では、しこなさん」と思っていました。そんな時、地元の嘱託員や農家の人たちから「イノシシ対策ば教えてほしか」と相談され、共に活動を開始。区の代表に駆除の免許を取ってもらい、箱わなの仕掛けと見回り役を担ってもらいました。区で取り組むことで、地域の課題として捉えてもらうのと考えたのです。山本さんは、「この取り組みで効率よく捕獲できるようになってきた。皆で協力し合わなければイノシシには勝てない」と力を込めました。



残されたイノシシの足跡

イモ畑にイノシシが侵入。収穫前のイモを食べてしまいました。



講じてきました。しかし、5年ほど前から三角町や不知火町でも出没するようになったイノシシは、駅や小学校、保育園の近くなど、子どもたちの活動の場でもたびたび目撃されるようになりました。三角小の鈴嶋聖一校長は、「平成27年頃から学校にイノシシが現れ始め、児童が目撃することもある。学校の畑で作ったイモが全て食べられ、畑は今でも閉鎖中。駐車場の山手には、箱わなを仕掛けてもらっている」と話していました。また、宇城警察署によると、この5年間に県内で起こったイ

イノシシの被害、
実はあなたにも身近な問題なのです
増え始めたイノシシ

松橋町や小川町、豊野町で頻繁に出没していたイノシシ。これまで、市と市内の熊本県猟友会の3支部(松橋・三角・小川)が対策を講じてきました。



平成30年3月13日、国道266号(三角町)でイノシシと衝突し、横転した自動車(宮川将人さん提供)

イノシシによる被害
県内における平成28年度のイノシシによる農作物被害額は、2億7241万円。市鳥獣被害防止計画による



と、市内における平成28年度のイノシシによる農作物被害額は1545万円で、その被害面積は6万2600㎡にも及びます。特に、水稲や果樹、野菜などの被害が著しい状況です。

自分たちの地域と畑は
自分たちで守る

いなば たつや
稲葉 達也さん(40) 〓 三角町 〓
ミカン農家



みやがわ まさひと
宮川 将人さん(40) 〓 三角町 〓
洋ラン農家

消防団のような地域貢献を

「地域の希望の星になりたい」立ち上がった

熊本県猟友会三角支部 「くまもと農家☆ハンター」

農家ハンターの立ち上げ前から宮川代表をサポートしていたのは、稲葉達也さん。熊本県猟友会三角支部長の山本さんから捕獲のノウハウを学びながら経験を重ね、平成29年2月にわな猟の免許を取得。翌月には、勤めていた会社を辞め、今では実家で両親と農業をしながら、イノシシ対策に取り組んでいます。「今直面している問題はイノシシによる被害。全力でやるしかない」と思ったと稲葉さんは話します。農家ハンターのプロジェクトリーダーとなった稲葉さん。わな猟の師匠である山本さんのことを「おっちゃん」と呼び、慕い、山本さん宅に通っては、捕獲のアドバイスを受けています。今では、県外にも出向き、技術指導を行うほどに。農家ハンターミーティングや講習会などでも、参加者に現場での経験を伝え、情報を共有したり、受け継いだ技術を広める活

ラなどを購入し、活動を始めた。活動の最前線に立つ

「地域を災害から守る消防団のように、鳥獣被害から自分たちや農地を守り、地域を元気にしていきたい」と話すのは、宮川将人さん。三角町戸馳島にある五蘭塾のメンバーとして洋ランの生産を行う有限会社宮川洋蘭の3代目です。直接、鳥獣被害を受けたことはありませんが、宮川さんは、県内の20〜40代の若手農家約100人でイノシシ対策の活動を行う「くまもと☆農家ハンター」の代表を務めています。結成のきっかけは、収穫目前のミカン園をイノシシに食べ尽くされた農家のおぼちゃんへの訴えを聞いたこと。経済的な被害を受けただけではなく、山に入ることへの恐怖心が植え付けられていたことを知りました。被害の深刻さを認識した宮川さん。同じ問題意識を持つ仲間と共に平成28年4月、農家ハンターを立ち上げ、有志を募りました。インターネットを通じてプロジェクト支援の方法クラウドファンディングで資金を集め、捕獲に必要な箱わなやカメ

農家ハンターの結成

より多くの人が参加できるように、情報通信技術(ICT)を活用した効率的な捕獲を目指す農家ハンター。箱わなに通信機を付け、箱わなの作動状況をスマートフォンなどの端末で監視することで、見回りの時間を短縮しています。また、自動撮影カメラを据え付け、現場の画像を確認することで、捕獲者のモチベーションの維持にもつなげています。さらに、精度を上げながら、よりコストを下げるため、低価格の超小型パソコンを使った通信機を自作。商品化にも取り組んでいます。

2人が目指すもの



イノシシ捕獲の最前線を学ぼうと農家ハンターミーティングに全国から約80人が集結。

捕獲した それは、「命」と向き合う瞬間が 訪れるということ

良心の呵責、心の揺れ

捕獲すると、必ず行わなければならぬ止め刺し。現場でのさまざまな思いを聞きました。「猟師ではなく、有害駆除から始めた人はつらい。絶対奪わなければならぬから…命を」「向かってくるならまだいい。」「同じ大ききくらの犬を飼っているんです。なんかですね…」

使命感だけでは、やりきれないことがあります。それは命を奪わなければならないという現実。でも、生活を守るためには、やらなくてはいけないという現実。やりたくないことをしているという現実。命を奪うとき、徐々に棒から伝わってくる重みとともに、その現実が重くのしかかってくる。



横たわるイノシシを前に駆除の現実を伝える

「命」の尊さを学んだ
だから、自分たちの手で

三角町古場区は、イノシシとの交通事故も起きているほど被害の多い地区。山本さんや農家ハンターの活動に賛同し、今年4月に、若手が「ポアハンター」を結成。イノシシ対策を講じています。

嘱託員の高岡実さんは、こう話してくれました。

「今までは全て山本さんに任せっきりでした。活動のきっかけは、わなの見回りに来ていた山本さんとイノシシについて真剣に話し込んだこと。山本さん、宮川さん、稲葉さんに命の尊さを話してもらったこと。そのことがきっかけで、区内を荒らすイノシシたちは、自分たちで捕獲しなければならぬと思いました。それでもみんな嫌々やっていたんです。ある日、宮川さんと稲葉さんに捕獲したイノシシの止め刺しを依頼しました。立ち会っていると、刺された小さいイノシシを、兄と思われるイノシシが



たかおか みのる
高岡 実さん(68)
三角町古場区
嘱託員

かばってしまいました。『でも、命を奪わなければならない。早くストレスを解消してあげなければ』と言う2人の目には涙が浮かんでいました。それからです。みんなが変わったのは。これは、自分たちの問題。自分たちで解決しなければならぬと。」「今では、山本さんのアドバイスを受けながらですが、箱わなの設置から止め刺しまで仲間とできるようになりました。若手たちは、猟友会と農家ハンターに入り、活動を始めました。箱わなの見回りや「えづけSTOP!」への取り組みなども区民同士で協力。農作物の残渣集積場も作り、イノシシが区内に近寄らないように工夫しています。捕獲した命はできる限り食用肉に変え、地域の人たちとありがたくいただいています」

いただいた命 その命は絶対に 活かさなければならぬ

思いとは裏腹に、
立ちほだかる大きな壁

山本さん、宮川さん、稲葉さんは口をそろえてこう言います。「命を無駄にしてはいけない。活用しなければ、人間のエゴになってしまう」

「だが、今抱えている大きな問題でもある…」

増え続ける捕獲数に対し、獣肉処理加工施設がないため、食材として流通させることができていないのが現状です。当然、捕まえたイノシシを山中に遺棄することはできません。現在は、私有地に大きな穴を掘って埋設しています。

「施設で精肉できれば、おいしくいただけるのに、今は命がここで止まっている。とても胸が痛い」と皆さんは話します。現在、自然の恵みとしておいしくいただけるジビエはブームと

イベントなどで、イノシシ肉のベーコンや井ぶりなどでジビエ料理のおいしさを伝えています。



水分量などを調整しながら、肥料化を行っています。右は試作品。



余すことなく 資源化することで 有効活用を目指す

と力強く話しました。

「命」を余すことなく

農家ハンターの皆さんは、仕事の傍ら、県内の高校や大学などへ出向き、新たな地域課題として獣害対策の大切さを伝え、ジビエ料理の普及活動にも取り

組んでいます。

また、硬く食用には適さない部分をペットフード化する方法や、堆肥化機械を導入し、内臓などを肥料に変え、農家に還元できるように、最大限に活用できるように模索しています。

年々減ってきているのが現状です。イノシシが人里に下り、人の居住区とイノシシの住処が重なってしまえば、私たちは安心して住むことができなくなってしまうのです。

イノシシは、追い払うだけでも、捕まえるだけでも、その被

害は減りません。地域が一体となってバランスよく対策を講じていく必要があるのではないのでしょうか。今、目の前にある鳥獣害問題は、避けては通れない道なのです。

市では、今年度から鳥獣害対策の予算を増額し、新しくイノシシを寄せ付けないようにする忌避剤の補助を導入するなど、対策の強化を図っています。

また、JA熊本うきは、鳥獣害対策本部を立ち上げ、市内各地での説明会を開くことで、地域を挙げた取り組みを進めています。

わずか数年前からイノシシが出始めた三角町。ここで駆除活動を続けてきた人。その教えを受け継ぎながら、新しい技術を導入し、対策に乗り出した若手農家たち。その活動に賛同し、新たに立ち上がった人たち。支援を始めた団体。今、この地域

引き継ぐものを増やし、負のスパイラルを好循環にその先を目指して

地域の課題は自分たちで

「イノシシなんて見たことない」「農家だけの問題なのではない」「そう思っている人もいるかもしれません。」

しかし、これは地域の課題なのです。イノシシが増え続ければ、さらに農業被害が増え、離農につながり、耕作放棄地が増えてしまいます。耕作放棄地は、イノシシにとって好都合な餌場となり、イノシシがさらに増えてしまいます。農業従事者や狩猟者も高齢化が進んでおり、対策を講じることができない人が

地域に広がる イノシシコミュニケーション 世代を超えた交流が深まる

高校生とタッグを組む

9月11日、小川工業高校には、出前授業を行う皆さんの姿がありました。

授業を受けたのは、これから三角町に仕掛ける箱わな製作に取り組み、機械工作部と課題研究班の生徒19人。

宮川さんは、イノシシによる農作物の被害状況や車との衝突事故の現状などを伝え、この問題を放置すれば、離農や過疎化を進行させかねないこと、地域全体で対策を進めなければならぬことなどを訴えました。

その後、生徒たちは箱わなの組み立て作業も体験。センサーの稼働の仕組みやえさの置き方などを山本さんや稲葉さんに聞きながら、実際に組み立てていました。生徒たちは、この授業で学んだことを活かしながら、

箱わな作りに挑みます。出来上がった箱わなは、畑に仕掛けられ、自動撮影カメラで撮影した様子を共有したり、希望者には現地見学会などを行ったり、今後も共に活動が続けていきます。

イノシシは共通の話題

「使命を感じながらも仕事との両立は本当に大変です」という皆さん。

しかし、活動を通して地域との交流が深まっていることに、やりがいを感じています。

今まで話をする機会がなかった人からも、「大根とれたけん食べて」「今年はタケノコを食べることができた」と声を掛けられるようになったそう。イノシシの被害の話題ともなれば、話が尽きないとか。イノシシが地域にもたらしたのは、課題や

みんなで、
イノシシピース。



被害だけではなく共通の話題。世代を超えて深まるイノシシコミュニケーションは、地域の活性化にもつながっています。

ではプラスの循環が動き始めています。

私たちにできること

私たちもこの事態を他人事だと無関心にならずに、私たちが

私たちも

課題に立ち向かっていきます

住んでいる地域の問題だと受け止める必要があるのではないのでしょうか。自分でできることを考えることで、厄介者だといわれるイノシシと共生できる未来が拓けてくるかもしれません。さあ、一歩前へ。



いなば しょうじ
稲葉 正二さん(60)
= 三角町宮崎区 =

「殺生ごとは皆嫌がるけれど、私たち農家が自分たちのことと捉え、率先して立ち上がらなければならないと思いました。地域の皆さんが安心して農業が営めるように、生活していけるように、区のリーダーとして1頭の被害でも減らしていけたらと思います」



いのうえ たくや
井上 拓哉さん(22)
= 千葉県野田市 =

「農家ハンターの考え方に賛同し、サポーターとして出資したことがきっかけで、現在、活動の手伝いをしています。東京農業大学卒業後には、農家ハンターとしてイノシシ対策を行うために宇城市へ移住予定。僕でも成功できるということを証明したいです」